

・登場人物

姉
妹
男
女
旅の男
父
母
医者

シーン1 再会

街はずれの高台にあるカフェ。窓際の席に姉と妹がテーブルをはさんで座っている。他に客はいないようだ。向かい合ってはいるが、それぞれメニューをみたり、窓から風景を眺めたりしている。どことなくぎこちない様子から、しばらく沈黙が続いていたことがうかがえる。

姉 ここ、いい眺めね。
妹 ・・・うん、今日は天気もいいね。ちょうど街が一望できて、気に入っているの。
姉 よく来るんだ。
妹 ええ。あ、ご飯食べた？ここのランチおいしいの。
妹 残念。もう食べちゃった。また今度の楽しみにするわ。
妹 お姉ちゃん今もこの辺に住んでるんだっけ？
姉 もう引越した。ちよつと離れちゃったけど、また来るわよ。
妹 そうなんだ。じゃあありがとう。わざわざ来てくれて。
姉 いいのいいの。こんなすてきな場所紹介してもらえたんだから。
妹 静かだから。
姉 ええ．．．。客、いないわね。
妹 そういえば他にお客さん見たことないわ。
姉 え？そうなの？大丈夫なのこの店？
妹 うん。昔からあるし。
姉 そうだったかな。
妹 家から見えてたじゃない。子供の頃からおしゃれだなーって思ってた。
姉 ぜんぜん。覚えてない。
妹 私はいつも家にいたから。

姉 そうだったかもしれないわね。
妹 最後に会ったのはいつだった？
姉 覚えてないの？
妹 覚えてるけど。えっと、去年だったかしら。
姉 もう二年になるわよ。そうね、あの時以来ね。
妹 あの時以来か。何も変わらなかったね。
姉 あなたはそうかもしれないけどね。で？そんな話をしに来たの？
妹 ごめん。お姉ちゃん忙しいんだよね。
姉 そんなことないんだけどさ。私せつかちじゃない？
妹 そうだった？
姉 そうなのよ。でなに？
妹 うん。
姉 なんの話？なにかあるんでしょ？
妹 あの。実はね……。
姉 ……。
妹 私整形しようと思うの。
姉 ……。
妹 どう思う？
姉 ……どこを？
妹 どこって、顔よ。
姉 顔のどこよ。二重にするとか口元をとかいろいろあるじゃない。
妹 目と鼻と顎と、だいたい全部。
姉 ほとんど全部ってこと？
妹 うん。
姉 福笑いみたいに。
妹 福笑い？
姉 はあ。
妹 え？反対？
姉 当たり前じゃないの。
妹 ……。
姉 お金かかるんでしょ？
妹 まあ。
姉 少しじゃないんでしょ。
妹 うん。でも今までの貯金とローンでどうにかなるよ。お金使うことなんてほとんどなかったし。貯まってるの。
姉 でもそんなことに全部使っちゃうなんて。あ、いや、お金はまああれだよ。だけど、顔切っちゃう

なんて・・・。
妹 綺麗になるのよ？
姉 あなたそんなに悪い顔してないわよ。うん。それにね、顔は作りより表情なのよ。ほら、笑ってみなさい。
妹 ここで？
姉 にこって。ほら。
妹 (ためらいながらも笑う。ああ、私の笑顔ってひきつつちゃうわ)
姉 違う違う、ここ(自分のほっぺをあげながら)をあげて、にこって。
妹 (自分で自分のほっぺを引っ張り上げるが、やはりぎこちない)
姉 ああもう、こうよ。(強引に妹の頬を引き上げる)
妹 むぐぐ。。もう！やめてよ。
姉 わかったわ、あなた整形より笑顔の練習よ。
妹 なにこれ？なんかのセミナー？
姉 セミナー？やりましょうか？
妹 いらないよ。。。
姉 なんで？笑顔いらんない？
妹 あるわよ。普通に。
姉 いーって、いーってして。
妹 。。。
姉 やって！
姉 こうよ。(身を乗り出して口に手を突っ込もうとする)
妹 わかったから。いー！いー！
姉 そうそう、そこからほっぺたの肉を上にあげるの。
妹 い？いいい？(うまくできない)
姉 まあ、そう、がんばって。そのうちうまくいくから。
妹 もういい？
姉 いいわ。うん、これでもう整形はいらないわね。
妹 あの。関係ないから。
姉 え？
妹 笑顔、関係ないから。がっかりだよ。
姉 がっかり？なんで？
妹 私はお姉ちゃんなら賛成してくれると思ってた。
姉 なんで？普通反対するわよ。ましてや私、家族だよ？整形なんて。。。
妹 でもだって、わかってくれると思って。
姉 。。。
妹 だってお姉ちゃんは。。、

店員の男がコーヒーを持ってくる。ここからしばらく、妹はその場に居ないかのように扱われる。つまり姉と男だけの空間になる。今後何度も男は出現することになるが、彼と会話をしていくものは、基本的に二人きりの空間に居ることになる。男に限らず、おしまいまで一対一のやり取りを基本として進行していく。

男 コーヒーです。

姉 ありがとう。

男 どうして反対なんです？

姉 え？

男 妹さんの整形ですよ。

姉 盗み聞きしてたの！？何ですあなた。

男 (テーブルにつく)

姉 なに座ってんのよ。

男 あなたは誤解なさっている。

姉 なんなんですかあなたは。

男 カフェ店員ですよ。お姉さん、妹さんの気持ち考えてあげましたか？

男 たばこに火をつける。

妹 ちよつと、たばこは・・・。

男 だめですか？これは失礼。

男、たばこを消す。

男 まあそんなにあれしないでください。目つき怖いですよ。

姉 そりゃあそうでしょうが。

男 お姉さんは反対なんですよね？ええ、あなたの言うことはもつともだ、間違っていない。だけどね、生きた年輪は顔に刻まれるんだ。それは人そのものだよ。顔を変えてしまえば、人生は変えられるんですよ。わかるでしょ？

姉 ……。

男 あなただって、そういう経験、あるでしょう？

姉 あります。

男 そんなあなたが整形に反対するなんて、ちよつと理解に苦しみますね。
姉 だって私とあの子じゃ違うじゃない。

男は消えて、姉と妹の空間になる。

妹 自分で自分を変えようとしたよ。いろいろがんばろうとはしたんだよ？

姉 そうね。うん、わかる。だけどね、そういう手術はリスクがとても大きい。それだけの覚悟があるかどうかって話よ。あなたのことを知っている人はみんな、変わったあなたを見て驚くわ。そしてそれを受け入れられない人もいる。それは大変なストレスになるのよ。

妹 そうかもしれないけど。

姉 私はそうだったの。

妹 お姉ちゃんはそうかもしれないけど……。

姉 みんなそうなのよ、私にはわかるの……。ねえ、いつからそんなこと考えていたの？

妹 いつから……。いつからだろう。

姉 ここ最近のことじゃないのね？

妹 うん。多分結構昔から整形したいって思ってた。

姉 ふわっとしてるわね。

妹 でも決断したのはまあ、最近。

姉 何かあったの？

妹 えっと。

姉 なにかつらいこと？

妹 ドラマをみてて。

姉 あ、なんか整形のドラマあったわね。

妹 うん。多分それ。それみてて、あー私もーとか、思った。

姉 バツカじゃないの？

妹 なんでかなー、そんなに面白くなかったのにな。

姉 なんて笑ってんのよ。

妹 うける。

姉 そんな、くだらない。くだらなすぎる。

妹 あはは、なんかおかしい。くだらないよね。

姉 バカ。

妹 でも軽い気持ちじゃないんだよ。昔から感じていたの。使命感？

姉 いい？生きた年輪は顔に刻まれるの。人そのものなのよ。顔を変えたら、それまでの人生を失っちゃうんだよ。

妹 それでいいんだよ。

姉 ……あ、そうか。

妹 お姉ちゃんはどうやって決断したの？

姉 私？私の話は今いいじゃない。

妹 その、知りたいの。聞かせてくれない？今日はそれが聞きたかったの。

姉 整形する前提の話なの？
妹 わからない。
姉 私の場合はほら、自然とそうなったのよ。
妹 自然？
姉 もともとこうだったから。
妹 じゃあ私も同じ。
姉 それは違うじゃない。
妹 なにが違うのよ。
姉 私とあなたは・・・違うじゃない。
妹 うん。そうだね・・・あのでもごめん。こう言ったらあれだけど、今日はあなたの説教を聞きに来たわけじゃないの。
姉 説教って。
妹 もう決めたことなの。お金も振り込んでるし、実は準備もほとんど済んでるの。明日から入院して、メスを入れるだけ。お姉ちゃんには言っておかないといけないと思って。
姉 お父さんとお母さんには話さないの？
妹 ・・・うん。
姉 そっか。それがいいかもね。
妹 やっぱりお姉ちゃんはあるから家には、
姉 帰ってない。
妹 私も、何となく帰れなくなっちゃった。
姉 そう・・・。

男、来る。大きなパネルを持ってきている。パネルにはのっぺらぼうのように、目鼻のパーツがない顔が書かれている。そこに配置を変えられるようにはらばらになった顔のパーツが一式ある。いわゆる福笑いだ。

男 少し遊んでみましょうか。
妹 ええ。
男 たとえばですね、はいこれ。この人。何の変哲もない顔ですね。
妹 ええ。
男 ここにこう、ほくろを貼ります。(泣きホクロのいちに貼る) どうです？
妹 あ、涙もろそう。
男 印象変わりましたね。情愛にあふれた顔になりました。続いてここ(口元に貼る)
妹 大人っぽくなった。
男 そうです。これだけで性的魅力がモワモワ沸き上がってきますね。
妹 すごーい。

男 これをここ（頬あたり）や、ここ（眉間）に貼っても強烈に個性として他人の頭に記憶されます。さらにですね、こうしてみたり、こうしてみたり（モニタージュ写真のように口や目を別のパーツに変える）どうです。

妹 別の顔ですね。

男 まあそうですね。きつとこう変えてしまうと、他人からの接し方がぜんぜん変わってきます。人は顔じゃないと言います、確かにそうです。だけれどまずは顔です！いや、顔です！ファースト・インプレッション！

シーン2 コスプレ会場

前の数年前。どこかのイベント会場。アニメなどの衣装をまとった男女に、それを撮影する男女。コスプレのイベントである。妹が何人かの撮影者からフラッシュを浴びている。思い思いのポーズとアングルで撮影を楽しんでいる。

少しすると別の女がくる。それまで妹を撮影していた人たちはみんな新しく表れた女の方へ向かっていく。どうやらその女は人気があるようだ。その場に残される妹。だがすぐにあとから来た女は妹に気が付き、近づいてくる。どうやら顔見知りのようだ。撮影者たちはどこかに消えてしまった。

女 お疲れさまー。あ、来てたのー？声かけてよー。

妹 わー。気がつかなかったー。元気してた？

女 元気元気ー。晴れてよかったね、台風近づいてるんだって？

妹 もう逸れたみたいだよ。

女 そうか、よかったー、じゃあずっといい天気だね。あ、今日はやっぱりそれにしたんだ。

妹 うん、最近私の中でこれが来てるの。

女 わかるー、かわいいー。

妹 あなたの方がかわいいわよー。やっぱり着る人が綺麗だと衣装もはえるねー。

女 そんなことないわよー。あなたもかわいいじゃない。

妹 そんなことないわよー。

他の集団が来る。彼らは女に声をかける。女はそれまで話していた妹から完全に意識を外してしまい、集団についていく。

妹 （独白）私は高校を出て、大学へ行ったわ。多くの人がそうするように。大学では新しい趣味と仲間を見つけた。コスプレって知ってる？アニメやマンガの衣装を着て、それで集まって撮影会とかするの。コスプレすると、自分を忘れることができた。カメラに収められた私はあくまで作り物なんだけど、

私じゃなくてもその時は作り物の私が本物だった。不細工な自分を忘れることができたの。ここには友達がいるし、出会いもある。鬱陶しい本物から解放されるた。だけれどね、そんな中でもね、ふと思いつくことがあるの。あの子はとてもいい子。こんな私にも優しく、友達も多い。そして、とてもかわいい。私はあの子が好きはずなのに。どうしてだろう。わからない。

男が現れている

男 嫉妬ですよ。

妹 そうね。

男 ここにはお姉さんはいないじゃないですか。せっかく解放されてなのに、きちんと逃げなくちゃ。

妹 あの子はお姉ちゃんじゃない。思い出したくもない。仲良くしたい。ああもう、心の隙間に入り込んでくるってことがあるとすればまさにこれだわ。

男 でもあなたはもう、そんなことに苦しまなくていい。違いますか？

妹 その通りよ……。 (姉に向けて) なにが悪いって言うの？え？あなたにはわからないわよ、成績もよくて、スポーツもできて、男のくせに顔だっていいわ。私にない物をすべてもっている。

姉が現れていた

姉 あなたは、何もわかっていない。あなたは、苦しむ必要がないの。あなたはすべてを持っていて、私は何も持っていない……。

シーン 3 姉の旅

姉、一人で旅にでる。バイクで荒野に走る長い道路を駆けていた。日本ではないが、日本かもしれない。しばらく快走していたが、急にひどい雨に見舞われた。ちやうど町が見えてきたので今日はここで一泊しよう。バイクを止めて宿を探し、一杯ひっかけようとバーに入った。

姉 あやうくスコールに巻き込まれるところだったよ。ビールお願い。

旅をしているらしい男が入ってくる。

旅の男 ふう外はすごい雨だね、ビール頼むよ。

姉 ……。

旅の男 宿にバイクがあっただけど、君のかい？

姉 そうだよ。

旅の男 そうか、なんというか・・・、すごいバイクだね。
姉 ありがとう。

旅の男 中国人？

姉 いいえ。

旅の男 韓国人？

姉 いいえ。

旅の男 台湾？

姉 いいえ。

旅の男 もしかして日本人？

姉 うん。

旅の男 僕もだ。出身は？

姉 大分。

旅の男 ほんとに？僕も大分だよ。

姉 うそ！すごい偶然だね。

旅の男 僕は車で旅をしているんだ。もう少し話せないかい？外はすごい雨だから宿まで送るよ。

姉 いいのかい？助かるよ。

姉と旅の男はそのまま一晩を過ごしてしまう。

姉 私には、機能しない子宮と、機能しない精巣があります。遺伝子は女に近いのですが、ペニスはついています。体毛は薄く、体臭も女です。実のところ、私に明確な性別ってのはないんです。最近では男と女以外にもいろいろと呼び方があるそうだから、呼ぼうと思えばなんだって名前を付けられるんだけれどね。つまり、社会ってのは人を「何か」に当てはめていないと落ち着かないのよ。そう、股間についているモノのせいで、長い間男として生きてきたわ。私には性別がない。だから、男を演じることにストレスは感じなかった。まあ面倒は多かったけどね。あの旅の途中、私はあの人に出会った。そして・・・私は・・・。

シーン4 妹美術部時代

妹が空中のキャンパスに絵を描いている。

妹 私は絵を描くんです。こういった、見たこともない生き物を描くことが好きです。高校時代は美術部に所属していました。美術部では、友達ができました。それまでは引つ込み思案で、あまり人に心を開けない性格だったんですけど、ここでこうやって心を開き、コミュニケーションの糸口を探り当てたのです。あのころは楽しかった。私はね、そのときやっと普通を手に入れたの。

近くで姉がみている。同じセリフが繰り返されるが、姉はところどころ妹を笑っている。

妹 私は絵を描くんです。こういうった、見たこともない生き物を描くことが好きです。高校時代は美術部に所属していました。美術部では、友達がたくさんできました。それまでは引つ込み思案で、あまり人に心を開けない人生だったんですけれど、絵を描くことで心を開き、コミュニケーションの糸口を探り当てたのです。あのころは楽しかった。私はね、そのときやっと普通を手に入れたの。あはは。やっと普通を手に入れたの。

男が現れている。

男 (絵を見ながら) すごいですね。妹さん。

姉 なんてあんな変な絵ばかり描くのでしょうかね。

男 これなんか、なに？馬？

姉 あー、カバ？水辺の生き物かしら。あの子、場所を見てそこに住む生き物を想像するって言ってたわ。

男 なるほど。このくちばしは魚を捕るため、みたいなの？

姉 多分。

男 これは？

姉 これはきつと、強い重力に対抗するために金網状に進化したのね。

男 へーえ……。わかりません。

姉 あの子はね、空想の世界を作り上げては、そこに入り込んで遊んでいたの。お人形遊びとかあるじゃない？あれにしてもやたら設定が細かいのよ。

男 たとえば？

姉 そうね、人形……。っていうか人形じゃないんだけどね、消しゴムあるじゃない？あれをちぎっては並べてちぎっては並べて、それはいっぱい、何十個も。それに一つ一つ名前を付けて、人間関係まで決めるの。それを模造紙に自分で書いた街に並べて、ぶつぶつぶつぶつぶいいながら遊んでるの。消しゴムのかけらなんてどれも同じに見えるのに……。すごいよね。

男 天才だあ。

姉 そうね。だけど不気味に思った母はその遊びをやめさせたのよね。

男 もつたいない。

姉 それからは絵を描いていたわ。

男 それであんな不気味な。

姉 うんうん。

男 でもあれですね、その、妹さんはずっと一人だ。

姉 え……。？

男 妹さんはずっと一人で遊んでいた、ですよ？

姉は答えずに、その場を去る。

男 ちよつとどこいくんです、重要なところですよ？

男は一人残される。

シーン5 姉の治療と、妹の孤独

ここは診察室。医者と父がいる。

医者 おまたせしました。

父 あ、いえ。それでそのう……。

医者 えー、お父さん。

父 はい。

医者 お子さんには少し、特徴があります。いわゆる普通の子にはない特徴です。

父 というと？障害……ですか？

医者 障害……あいや、これを見てください。

父 はあ。

医者 これはペニス、おちんちんです。

父 ええ。

医者 そしてここを見てください。これは子宮です。

父 え？どういうことですか？

医者 精巣はありますが、小さいです。卵巣もあります。しかしその、どちらも本来の機能は果たさないでしょう。もしもこの段階で子宮を切除してしまえば、男性器が機能する可能性もあります。

父 いやでも、それで治るってわけではないんでしょう？

医者 もちろん、絶対とはいえません。リスクは高い選択です。ただわかってほしいのが、これは怪我や病気ではないのですよ。

こんどは父と母が向かい合っている。

母 ……いいんじゃない？

父 どうして？

母 命に関わることではないんでしょう？

父 適切な治療をすれば命には関わらないそうだな。

母 生きられるんでしょう？

父 まあ。

母 悩んだってしかたないじゃない。お医者さんに頼るところは頼って、私たちはこの子と幸せに生きることを考えるべきでしょう？こむやみに切る必要はないでしょうよ。

父 そうだね。

診察室に戻る。

医者 それで、決めていただかないといけないのですよ。

父 というと？

医者 私どもでは、その、お子さんの性を決めることができないのですよ。

父 えっと、はい。

医者 つまりですね、赤ちゃんの性別をどちらで届けるか、決めていただかないといけません。

父 ……急にそういわれましたも。

医者 そうですね、本来医者の判断が必要なのもかもしれませんが、私としてはご両親のお話も伺おうという方針です。

父 と言われましても、私たちは素人ですので、その、どう言ったらいいか。その、こういった場合、みなさんどうなさってるのです？

医者 こう言ったケースでは、おちんちんがついていれば男、としていることが多いようで……。

父 じゃあ……そうですね、男ではないのでしょうか……。

医者 まあその、どちらとも決めないという選択肢もあります。自分で選択できる年齢まで待つて、本人に判断をゆだねる、と。

父 あ、なるほど。

父と母と医者はそれぞれがそれぞれの空間にいるようだ。

母で、そのまま帰ってきたの？

父 そう言われても、今はどうすることもできないじゃないか

医者 私だってこれ以上のことはできませんよ。

母 どうしてこんなことに？じゃあ子供はできないってこと？ちよつと教えてよ。

父 考えたくないなあ。もう考えたくないなあ。考えたってしかたないよなあ。

医者 はあ、いや最前は尽くしているのですが。お気持ちちはわかりますよ？

母 ああなたもつと真剣に考えなさいよ。将来はどうするの？

父 休日はずっと家族に費やさないといけないな。給料これ以上増えるのかなあ。

医者 先のこと？正直言っつてわかりませんよ。だから、一緒に対処していきましよう。そう難しく考え

ないで。

母 教えてよ、だれか私に教えてよ！

父 男でも女でもどっちだっていいんだよ！もう！

医者 男でも女でも、なにか違いますか？

母 違うわよ！違うでしょう？

妹が姉を追いかけている。幼少期のようだ。

妹 おにーちゃん！

姉 ……

妹 おにーちゃん！どこいくのー？

姉 ……？

妹 どこにいくのー？

姉 え？

次第に二人は成長する。小学生高学年くらい。

妹 お兄ちゃんどこ行くの？

姉 病院だよ。

妹 いつ帰ってくるの？

姉 遅くなっちゃうかも。

妹 またー？

姉 うん、ごめんね。

姉は出かけてしまう。母と父も姉についていく。妹はいつものように残される。

妹 わたしはー、いつもー、ひとり。雪だるま作ろう。自転車に乗ろう。

消しゴムをとり出す駅に行き、消しゴムをふたかけらちぎって落とす。

妹 ここは駅。駅には脚が住んでいるの。長くて細い綺麗な脚。右足は東に、左足は西に向かって歩き出すの。がたんごん。がたんごん。電車に乗ってどこまでもいくの。駅長はジャーニーさん。ジャーニーさんはいつかここから街をでて旅に出たいと思ってる。だけどそれはいつか。本当に街をでられるのかしら。(ジャーニーさんを見送る。じゃーねーのイントネーションで)ジャーニー。

カフェに向かう。消しゴムを一つちぎって落とす。

妹 ここは街を見晴らせる高い場所。ここにはおしやれなカフェが一軒あるの。ここで働いているのはミスピューパ。お客さんはこないからいつも窓際の席に座って、コーヒーを飲みながら街を見下ろしている。街を見て、人々の生活を想像しているの。毎日そうやって過ごしているけどちっとも飽きない。だけれどいつかこの店にもお客さんが来る。そう、私がお兄ちゃんとコーヒーを飲みに行くの。きつとすぐ先か、ちよつと前のこと。この街を見下ろしながら。

病院に向かう

妹 こつちには病院がある。お兄ちゃんが通っている病院。ここには怖い先生がいるの。名前はわからないから、みんなドクターX（エックス）って呼んでる。地下には悪の秘密基地があって、入院している患者は夜中そこに連れて行かれて怪人に改造されちゃうの。だから絶対ここには近づかない。あつ、あまりこのことを話すと組織に狙われるから。

今度は商店街に向かう。せつせと手を動かして説明。

妹 ここは商店街。みんなで買い物に来るわ。みんなで……。たまにだけどね。お父さんもお母さんもお兄ちゃんも忙しいから。しかたないね。ここはたくさんの人が働いている。肉屋、魚屋、八百屋、本屋。たくさんのお店があって、そこにはスーパーマーケットもあるの。スーパーではお母さんが働いている。だからお母さんも家にはあまりいない。

そして今度は自宅だ。

妹 そしてここはここ。あー、私の家。これ（消しゴムのかけら）は私。この私もこの家の中で街を作って遊んでいる。これも、私と同じようにこうやって、消しゴムをちぎって街を作っている。これのちぎった消しゴムも、同じように消しゴムをちぎって遊んでいる。その消しゴムもまた……。ずつとずつとみんな街を作って遊んでいるの。そうね、私もより大きな私の消しゴムなの。大きな私もさらに大きな私の消しゴムで。ずつと続いているの。この街だつて、この世界だつて、きつと一つの消しゴムなんだ。隣の家には一人暮らしのおじさんがいるの……、

男 あなたはずうつと、劣等感と疎外感を抱えて生きてきた。

妹 別に、そうかもしれないけどもう済んだことよ。

男 今だつてずつと劣等感を感じている。秘密を打ち明けてくれなかった家族を恨んでいる。

妹 違う。ただちよつと寂しかっただけ。恨むつて、そんな。

男 何をためらうのですか？正直になつてぶつからないと。本音をぶつけ合わせて初めて家族の絆が深まるものですよ。

妹 どうかしら。

男 私にはわかってますよ。あなたはつらい子供時代を過ごした。
妹 あなた、なんなの？

男 中学校を卒業するまでは、学校でも一人、家でも一人、
妹 そんなことなかったわ。あなたは間違っている。友達がいた。

男 高校に上がってからは。あー、どうでしたっけ？

妹 高校では、

男 美術部に入りましたね。

妹 そうだったわ。楽しかった。私の居場所。

男 でもあのころの仲間とは連絡を取っていない。どうして逃げ出したんです？

妹 別に。

妹と男の会話は中断され、姉と男の会話が始まる。妹はまだ町をつくっている。

姉 結局のところですね、私のせいなんですよ。

男 ほう。

姉 つまりその、私が病院に行くたびにあの子は放っておかれたの。私がこういう身体でなかったら、あの子は整形したいとか言うことはなかったと思うの。

男 ちよつとまって、それがどう関係するんです。

姉 だからその、

妹の声が聞こえる。妹が近くにいる。

妹 お姉ちゃんのせいじゃないよ、だからあなたにはやめさせる責任なんてないんだよね。ねえ、お姉ちゃん。今日の私とさようならをして。そして今までの私は、いなくなる。

姉 私のこと、忘れないよね？

妹 お姉ちゃんは、私のこと忘れてたよね。

姉 でも思い出した。

妹 私のこと、何も知らなかったよね。

姉 知らなかった。でもこれからは私たち、近づけるんじゃないかな？

妹 わからない。あまりにも私たちは違いすぎるじゃない。

姉 そんなことないよ。

妹 またね。さようなら。

姉 あ・・・。

姉、独り。独白。

姉 夢を見ました。ある日、私はあの子になっていた。

姉は妹になっていた。一人で闇の中にいた。光を目指して歩いてはすぐにきえてしまう。光はあちこちにあつたが、次第に少なく弱くなっていく。しかし自分が『姉』だと気が付き、妹をそんな哀れにみていたのかと自己嫌悪する。そんな自分自身を俯瞰していたが、電話の音で目を覚ます。相手は妹だ。

姉 もしもし。え？うそ。こっち来てるの？うん。うん。うん。うん……。いいよ、じゃあ、会おうか。

暗転。

場面が変わると、最初のカフェにいる。あれから半年の時間がたっている。姉は以前と同じテーブルで妹を待っている。

妹 久しぶり。

姉 あ、

妹 うん。

姉 えっと、

妹 うん。

姉 ずいぶん変わったわね。

妹 そうね。

姉 ぜんぜん違う顔じゃない。

妹 綺麗になったでしょう？

姉 ええ、綺麗。

妹 でしょう？やっぱり正解だった。

姉 体調とかはいいの？

妹 うん。ありがとう。

姉 そう。よかった。

妹 ねえ、私本当に綺麗になったでしょう？

姉 美人になったし、おしゃれ。笑顔も綺麗ね。

妹 うれしい。

姉 おねえちゃんは変わらないね。今日も綺麗だね。

妹 え？そう？

姉 あ、そのバッグいいわね、どこで買ったの？

姉 これ？これは駅前の新しくできた店で。

妹 へー。かわいいー。今度連れて行ってよ。

姉 あ、うん。

妹 やっぱりお姉ちゃんは何とあわせてもいいよね。

姉 ……。

妹 あ、不機嫌？

姉 ……。

妹 怒ってるでしょ。

姉 そうみえる？

妹 だってテンション低いし。

姉 あなたが高いのよ。

妹 明るくなつたって、自分でも思うの。

姉 そうね。

妹 これが自分だと思う。私ね、整形して本当によかったと思ってるの。友達ができたし、仕事もうまく行くようになったし。あ、そうだお姉ちゃん、私転職したの。

姉 そう。

妹 びっくりしちゃったんだけどね、あつという間に内定もらえたの。前の時とは大違い。すべてが変わっちゃった。どこに行ってもね、だれと話してもね、笑顔で対応されるの。

姉 それが普通？

妹 違う？

姉 ねえ、私は普通かしら？

妹 え？

姉 明るくない？それとも変かしら？この格好に違和感ある？

妹 ないけど。

店員さんがコーヒーを持ってくる。

男 コーヒーです。

妹 ありがとう。

男 ……。(去る)

妹 (男の態度に対して) なによ。

姉 え？

コーヒーは来ていた。だが姉は男を認識していないようだ。

妹 あ、いや。

姉 ねえ、あなたこないだ、私があなただを見ていない、覚えていないって言ったわよね。
妹 そうだっけ。
姉 言ったの。じゃああなたは私の何を知ってるの？
妹 （何かを思い出すように頭をとんとんとたたいている。）
姉 何も知らないでしょう？
妹 そんなことない。私は、お姉ちゃんになりたかった。
姉 ……
妹 ずっと追いかけてたんだよ。お姉ちゃんにアコがれてた。きれいな顔になりたかった。だから、こ
うやって私はいま、お姉ちゃんみたいになれたって思ってる。

男が現れる。

男 どうですか、その後は。
妹 ええ、それはもう。
男 よかったですね。
妹 あ、あとですね……もてるんですよ。
男 へえ。よかったじゃないですか。充実しますね。
妹 えへへ。やっと本当の人生が始まった感じ。
男 だけどそれって、どうなんでしょう？
妹 ？何が？
男 つまりそれって、騙しているわけですよね。
妹 騙す。まあそうかもしれませんね。
男 その辺は受け入れているんですね。
妹 罪になります？
男 いえ、なりません。あなたが何も感じないのなら。
妹 いいじゃない。私の問題だし。（急に怒って）なにが悪いって言うの？え？
男 あなたはまだ何もわからないのですか？
妹 なんの話？
男 お姉さんのことを本気でわかっているつもりなのですか？あなたがアコがれていたお姉さんは、
本当は何を考えているのか。姉として、兄として、あなたをどう思っているのか？

姉が現れている

姉 私は産まれたとき、性別はありませんでした。だけれど高校を卒業するまでは、男子として生活して
いました。あなたから見るとどうだったのかしら。かっこいいおにいちゃんかな？

シーン7 回想

姉 18のとき、一人で遠くへ旅に出たわ。いろんな事から解放されて、気持ちがよかった。自由だったそこで私は、性を得た。以上が私。僕は、私は。私は僕を捨ててきた。僕は私から切り離されて、バラバラになった。不具の性器はあります。だからなに？捨てるまでもない。すでに形しか残ってないわ。手は？足は？いらぬいこんなもの。顔だつて、こんな整った顔、地獄しか見えないわ。私もこんなのははずしい！いくら化粧をしたところで、髪を伸ばしてそれらしく見えたって、女の顔にはならない。こんなもの。で、なんだっけ？私みたいになれた？

妹 え？ええ。

姉 私がうらやましかつたんだ。

妹 そうよ。

シーン8 人の定義

男と妹がいる。男がパネルを持つてくる。以前の福笑いとは違うもの。今回のパネルには全身が書かれている。女性のヌードだ。

男 少し遊びましょうか。

妹 また？

男 次はこれです。

妹 身体。

男 しかも、ヌード、いやん。

妹 今度はこれで何をするの？

男 この間と同じです。ただ少し、レベルアップしているんすよ。

妹 これがなんなのよ？

男 これは女の、人の体の絵です。

妹 わかるわよ。

男 体を入れ替えていきましよう。これを、こう。これを、こう。

足をや手の部分を、機械のパネルに置き換える。

男 どうです？

妹 サイボーグ？

男 これは人ですか？

妹 難しいわね。どこまでを人とやっていいのかわ。

男 でも実際、手足を事故で失ったり、あるいは産まれたときから持っていない人たちもいます。そして義手や義足で生活をしています。

妹 あ、そっか。そういう人たちもいるわね。

男 人で間違いなですか？

妹 ええ。

男 続けましょう。今度はこれを、こう、こう。

体をペろりと一枚はがす。すると今度は内蔵が描かれた絵がでてくる。そして内臓を人工の臓器に置き換えていく。

男 どうですか？

妹 人です。

男 そうですね。世の中には人工の臓器で生活している人もたくさんいます。では、デリケートな部分にいきましょう。

今度は顔をはがす。頭蓋骨が丸出しになる。脳は透けて見えている。

男 記憶はすべて脳の電気信号や化学反応って事はご存じですか？

妹 現代では常識ね。

男 じゃあ、この記憶をすべてデータにしてしまつて、脳と置き換えちゃいましょう。さて、人ですか？

妹 ……

男 もっと細かくすると、脳はいくつかの役割に分かれています。パソコンと同じです。長期記憶はハードディスクに、短期記憶はメモリ、情報処理はCPU。どこまで変えても大丈夫ですか？

妹 感情とか、残ってれば、人じゃないかしら。

男 感情。かりにすべてのパーツを交換していつて、感情すら再現できたとしましょう。相対する人が、その人が機械の体だと気がつかないまでに。実際に喜んだり悲しんだり、傷つくと痛みもする。するとそれは、人と何か違うでしょうか？

妹 違うわい。

男 ありがとうございます。では脳も目もすべて機械に変えちゃいましょう。

妹 人でいいわよ。

男 ええ、まだ人ですね。最後は難しいですよ、これです。

機械の顔と、体に機械のカバーを着ける。体には機械の性器がついている。

男 これは？

妹・・・。
男 人ですか？
妹 何がしたいの？
男 わかってるでしょう？
妹 人です。

姉が現れる。今度は姉と男の会話になる。

姉 考えるまでもないわ。
男 ほんとうに、そう思ってます？
姉 当たり前でしょう？
男 これじゃあ全部機械じゃないですか。人ってなんでしたっけ？
姉・・・。
男 あなたは自分を解体して、異物に置き換えてきた。切って捨て置いてきた手足は？心は？いったいどこへおいてきたんでしょうか？

妹がいる。

妹 でもね、私ならわかってる。わかってる！わかってるの！（自分に言い聞かせるように）だって、ずっとおねえちゃんを見てきたじゃない。見た。（男に向かって）なんだその顔は！そんな顔で私を見ないで！

シーン9 妹の想い

姉と父とのいつかの思い出の断片。

姉 ねえお父さん。
父 このとき、長男は思春期を迎えていた。すくすくと育つ息子は頼もしく、父としての幸せを感じざるを得なかったが、同時に不安の種も育っていた。息子は本当に男なのだろうか？男として育てて来て間違っただけじゃなかったのだろうか？日に日に募る違和感は無視できないものとなっていた。
姉 お父さん。

父 長男は色白で美しい顔立ちをしている。どちらかと言うと私の妻に似た顔立ちだ。・・・いや決してやましい気持ちなど、近親相姦など・・・何を考えているのだ私は。いやしかし、実のところアダルトビデオ鑑賞に関してはすこし覚えがある。近親相姦・・・もちろんそういったジャンルのビデオが嫌いなわけでもない。近親相姦・・・妻や息子たちにはきつとばれていない。ばれたらきつと私は、も

う・・・破滅。いやいや、何を考えているのだ！ええい！この思考というモノは・・・。そして息子！このいうことを聞かない息子！・・・はあ。私は・・・父親失格だ。

姉 お父さん。僕、水泳の授業にでるのが嫌なんだ。その、お父さんから先生に、言ってくれないかと思っ

父 ああ、いいだろう。父から言っておこう。

姉 うん。ありがとう。

間

このやり取りをこっそりと妹が見ていた。姉がそんな妹を見つめる。妹は一方的にみているものだと思っていたので驚き、目をそらして、逃げる。姉はそんな妹を追いかける。

妹 こないで！みないで！

姉は妹の顔を捕まえる。笑顔の練習をしていた時のように、がっしりと。

姉 何を今更。私はずっとあなたを見ていた。

妹 うそ！

姉 いい？見るって事は、見られてるってことなんだよ。馬鹿な子。

妹 みないで、みないで、みないで、みないで、

姉・・・。

妹 みないで、みないで、みないで・・・みないで！みないで！

姉 みんなあなたを見ていた！見えてなかったのは、あなただけよ。

姉は妹の真似をする。妹は悲鳴のような声でそれを妨害しようとする。当然できないのだが。

姉 私は絵を描くんです。こういった、見たこともない生き物を描くことが好きです。高校時代は美術部に所属していました。美術部では、友達がたくさんできました。それまでは引つ込み思案で、あまり人に心を開けない人生だったんですけれど、絵を描くことで心を開き、コミュニケーションの糸口を探り当てたのです。あのころは楽しかった。私はね、そのときやっと普通を手に入れたの。

妹 もう、やめて。

姉 ほら、顔上げなさい。私の心残りは、やつぱり、私のせいでああなたが顔を変えちゃったんじゃないか？ってこと。私は、あなたがあこがれるような人じゃないの。孤独で、陰湿なの。いっつも、とても人に言えないことばかり考えている。

妹 だれだってそうじゃない？

姉 あなた、いっつも私がいなければ、とか思ってたでしょ？

妹 違う。私はお兄ちゃんになりたかった。ただそれだけなの。

姉 私はあなたたちから逃げたわ。偉そうなこと言っても駄目ね。振り返ると本当に恥ずかしい。
妹 ……

姉 今だって、逃げてる。立ち向かったことなんかない。いつだって、状況を呪って、両親を呪って、あなたを呪って。あなたが逃げることを責めることなんて、本当はできない。恥知らずな生き物なの。

妹は姉を見つめている。

妹 私たちは魂がかわったんだよ。

姉 なにそれ。

妹 魂ってどこにあると思う？

姉 え？

妹 ほら、考えて考えて。

姉 じゃあ、(胸をさして) ここ？ (頭をさして) ここ？

妹 (股間をさして) ここかもしれないね。

姉 あはは。

妹 あれ、そもそも魂なんてあるんだろうか？

姉 あるよ！だって生きてるんだもん。身体中が、えーっと、身体中から？身体中に？なんだ？

妹 だから変化したんだよ。

姉 なに？

妹 私たち、魂が変わっちゃったんだよ！

姉 えーっと。

妹 だから、私は顔を変えて、お姉ちゃんは性別を変えて、生まれ変わったの。

姉 生まれ変わった……。違うわ、与えられたものをぶっこわして、人として死んだのよ。ああ、そうか、私たちはもう……。人じゃないんだ。

妹は自分の空想の町に帰る。そこには消しゴムとして散らばっていた姉の四肢と心臓があった。妹はそれらを集めてあげる。そして最後に、それと幼少期の思い出をたんすに収める、へたれてる姉を立たせて、自分は幼児時代にもどる。

シーン10 原初

妹 ねえ、お兄ちゃん。お母さんとお父さん寝たみたいだよ。

姉 ？

妹 またあれやろうよ！

姉 あれ？あ！（声を潜めて。気が付いたかのように幼児にもどってる）あれ！うん。
姉 じゃあ行こうか。
妹 うん！
姉 しい！静かに。
妹 ごめん。
姉 ゆっくりだよ、足音もたてちゃ駄目だからね。
妹 しい！。

ゆっくりと誰にも気が付かれないように移動。二人の服が収納してあるタンスの前につく。

妹 やろっか。
姉 うん。じゃあ、僕がこっちの服着るね。
妹 私がこっちの、お兄ちゃんの服だね。
姉 着れた？
妹 うん。あ、お兄ちゃん、似合ってる。
姉 へへへ。
妹 私は？
姉 似合ってる、かっこいい。
妹 やった！
姉 しい！。
妹 しい！
姉 ねえ、これでちよつと外にでない？
妹 え？駄目だよ、夜だし。勝手に出たらあぶないよ。
姉 ちよつと、玄関まで。
妹 やだ。怒られちゃう。
姉 大丈夫だよ、お兄ちゃんがいるから。
妹 （両親の様子を気にして）でも。
姉 じゃあ一人でいってくる。
妹 え……。じゃあ、ちよつとだよ。
姉 うん。
妹 えへへ。

二人、玄関まで行き、扉が開く。

姉 この世は、地獄だったね。
妹 そうだね。私他人が怖い。見られることが怖かった。

姉 私だって、同じ。あれから、あの人と会って、私は自分の性を自覚することができた。女として、これから生きていけるの。

妹 その人とは？

姉 もう会ってないし、会わない。どこにいるのか、名前もわからないもの。

妹 さみしくないの？

姉 さみしい？別に。

妹 そう。本当の事言うとな、実はわたしさみしいの。

姉 天国まで行こうかしら。天国はさみしくないかもしれない。

間

姉 でも本当はね、あの人はただのきつかけだった。本当は、昔からそうだった。私は女だって、頭のことかでわかってたの。だけど、ほらお兄ちゃんとして生活してたから、ね。

妹 でも、あこがれのお兄ちゃんだった。

姉 昔はよく服とつかえっこして遊んでたの、覚えてる？

妹 あ、うん。思い出した。

姉 私たちこんなことなんてしなくても、きちんと姉妹だったんだよ。

妹 ねえ、私たちもう会わない方がいいかもしれない。

姉 あ、それわたしもそう思ってた。

妹 うん。だよ。もう、いいよね。

姉 そうだね。

間

妹 (なんか泣きそうになりながら) ねえ。

姉 なに？

妹 おどらない？

姉 え？

妹 ほら。

妹 私たちは、人が人でいられる大切なものをぶちこわして、人になった。そうやって救われたのよ。でもわたしは、さみしいの。それがどうしてかわかるの。わかったの。

姉 何言ってるのよ。

妹 踊ろう？踊るの。

妹は踊りだす。姉は踊り切れないまま、それを眺める。妹はそんな姉の両手を取り、強引に二人で踊りだす。

姉 あ。

妹 ほら、楽しい。

姉 私は。

妹 私たちは、天国への道を見つけたの。こうやって、上っていけるの。

少し踊って、イスに座る。二人で眺めのいいカフェにいる。

妹 ねえ、また会おう？

姉 そうだね。また会おう。

おわり